

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊26年目
創刊1989年 Nr.302

GEKKAN-WIEN 2014年8月号



Erzherzog Leopold Wilhelm in seiner Galerie in Brüssel David Teniers d. J. um 1650 Leinwand, 124 cm x 165 cm Gemäldegalerie © KHM



力体制の強化、原子力人材育成の安全研究基盤の充実強化、国際協力準備と対応体制の強化、原子力過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 35



三月二六日〜二八日にかけて、日本原子力学会春の年会在が京都市大学において開催された。この年会のハイライトは、同学会が設置した東京電力福島第一原子力発電所事故に関する調査委員会の最終報告書が特別セッションで報告されたことであろう。初日の朝十時から始まった特別セッション会場には立ち見が出る程の超満員の約二百人が詰めかけた。同調査委員長の中東大教授は、事故の直接要因は、津波対策と過酷事故対策が不十分であり、緊急時対策や事故後の対策、種々の緩和回復対策が不十分であったことと指摘した。事故から得られた提言は、原子力安全の基本的な事項、直接要因に関する事項、背後要因のうち組織的な事項及び今後の復興に関する事項の五グループ、全五〇件に及ぶ個々の提言より構成されている。

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

具体的には、原子力安全の目標の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、過酷事故対策の強化、緊急事態への準備と対応体制の強化、原子力事故の明瞭化と体系化への取組み、深層防護の理解の深化と適用の強化、津波など外的事象への対策の強化、

充実、除染対象区域の設定、除染廃棄物の保管・貯蔵などである。特に、背後要因として、専門家の自らの役割に関する認識の不足を挙げている。これらの提言をどのように具現化して行くかが今後の大きな課題であるとしている。続くパネル討論では、事故シナリオ、テロ対策、社会のコンセンサスなど広範にわたる質問や意見が出席者から述べられた。筆者も想定外事象への対応について質問したが、今後に解決すべき課題も少なくないと感じた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市で開催される灯籠流しについて述べたい。地下鉄2号線のドナウマリナー駅でバス79Aに乗り替え「フリーデンスパゴデ」で下車し、ドナウ川に向かうと、一九八三年に造られた仏舍利塔が見える。ここに日本人のお坊さんが一人で暮らし、宗教を通してオーストリアの人々と交流をしている。当初は電気・水もなかったが、お布施や市の協力で住めるようになったそうである。広島に原爆が落とされた八月六日には、シュテファン寺院の前で原爆被害の写真を展覧を行い、カールス教会の人工池に灯籠を浮かべる。長崎に原爆が落とされた八月九日には仏舍利塔に集まり平和を祈って灯籠をドナウ川に流す。参加者の多くがオーストリア人やウィーンに在住の外国人で日本人は少ないと聞く。



余談であるが、筆者はウィーン赴任中、そもそも仏舍利塔の存在を知らなかった。帰国後に「月刊ウィーン」で初めて灯籠流しのことを聞いた。京都の嵐山灯籠流しも最近知った。京都でも知る人は少ないと思う。今年の嵐山灯籠流しに足を運べたらと思う。両市の灯籠流しを知ることができた幸運に感謝しつつ、編集部が撮影したウィーンの灯籠流しの写真を掲載させていたたく。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■